



アラン

—ノルマンディー—  
人のプロポII  
【2013年6月号】

翻訳：高村昌憲

私が子供だった時、フランス革命前のアンシアン＝レジーム（旧体制）時代の恐ろしい絵を私に描いてくれました。中でも取分け私がびっくりしたのは、領主が眠っている間、農奴たちは蛙が鳴かずに静かにさせるために、池の水を打たなければならなかったことです。要するに、最も多くの人々がこんなにも苦勞していても、誰かさんの喜びはこんなにも小さいのでしょうか。私が領主でその時代に生きていれば、気の毒な農奴たちに次のように言ってあげたいと思いました。「寝に行きなさい。あなた方がぐっすり眠っていると思うと、私は蛙の歌が気に入って楽しくなります」。

もしも私が金持ちに数えられ、豪華なホテルで非生産的生活を送っていたとするなら、その時から私は恐らく申し分のない進歩のことを考えながら自分を慰めるでしょうし、農奴が最早池の水を打たないで済むと私は思うでしょう。しかしながら、もしも私にとって役に立たない苦勞よりも私のためになるもっと良いものを見るならば、ほんの小さな喜びさえも逃しはしないでしよう。

もしも私が金持ちであったなら、恐らく私の家に電話を付けたくなって、数日後にはベルが鳴るのが嬉しく、私に質問する誰かとお話を始め、鼻声でビール樽とか子牛の肉を一キロ彼に持って来させることでしょう。ベルの音、黒い受話器、壁に取り付けられた緑色のコード以外に、私が信じるどころこの世で変わったものは何も無いように思います。勿論、もっと良く見て下さい。鉱石からは銅が抽出され運ばれて来るでしょうし、銅は坩堝の中へ流し込まれます。コードは伸ばされ、焼き直されて、再度運ばれて、巻かれて、空中や地下で解かれます。壁という壁を通過して行くことになり、僅かな亜鉛が電池の中で鉱石の状態に戻されるようになります。電話交換手はその上で、電話加入者の使用時間を計ることになります。全てがそうしたもので、五月蠅くて邪魔な人間や軽率な人間でも彼らを呪う代わりに、結局は平和を守るために私は受話器を取ることになります。それに反して、私の家人が三個のクロワッサンやードースのオレンジを手に入れるために、大変頻繁に電話をするのは本当です。以上は、何時も用心している注意力と、それと巧妙に結びついている努力との結果なのです。かくして私は労働のために莫大な時間を使うでしょうし、自分のための利益は殆どありません。

この様にして習慣や模倣が必要悪を生み、その満足感が何時も本当の喜びを与えるものではありません。次のように言われています、「こうやって、ほんの小さなことを変えるためにも、多くのことを変えなければなりません。何故なら全てはお互いに関係して結ばれているからです」。この様にして、まさしく王制の時代には領主が言うことは正しいのです。今も何も変わっていません。私がそのことが良く分かりますし、蛙を静かにさせるために、農奴たちは何時も池の水を打っているのです。

(一九〇八年一月二七日)

## 九十二 離婚 (LE DIVORCE)

私は、離婚に対して大変巧妙な弁護をする人の文章を読みました。そして最近、私は或るカトリック信者と交わした会話を思い出しました。そのカトリック信者は大変数学に造詣が深い人で、理解力に優れているのが分かります。問題を解く時、彼は決して奇跡を信じていません。しかし、自分の人生を生きる上では、小さな子どものように両眼を閉じて信じて仕舞います。何故なら彼が言うには、人生や死については不用心に行動しますし、疑問は彼の眠りを邪魔するからです。それは彼にとって問題です。小さな注射器などで服用されるモルヒネ以外に悲しいものはない、と私は決して思いません。

その日、彼は私に宗教を持たない人間は、カトリック的倫理と非常に異なる倫理を必ず教えなければならなかったと言いました。私が教えたことは、この世の全ての人々にとっての倫理は同一であり、アル中、遊蕩、裏切り、二枚舌、ペテン、盗み、暴力が余儀なくされた時、カトリック教徒はこれらの行為が〈神〉の絶対的意志によってしか禁止させられない、と考えることは大変に難しかったということです。従って私がそうであり、この世の皆がそうであるように、彼が従ったのは情熱が許容する限り、良識でした。そして彼は離婚にその良い例を見出したと思ったのです。

彼は言いました、「宗教を持たない人間は離婚が許されていると信じており、結婚には離婚が付きものだが、賢明で品行が良い結婚にすることも出来る。勿論、カトリック教徒の私は離婚を信じる事が出来ないし、信じません。離婚して結婚するには内縁関係しかない、と私は言います」。

私は彼に答えました、「それは言葉の問題です。もしも私が〈教会〉の真の教理を良く知っていたなら、〈教会〉は内縁関係を絶対的に容赦なく禁じたりしないでしょう。本当のことを言えば、〈教会〉は容赦なく決して禁じたりしません。心の底に隠された動機が最後には救われて、煉獄後に真剣な冒瀆者まで救済してくれることが可能であると何時も〈教会〉は認めて許しています。

ねえ、モラリストが恰も、神も不要、主人も不要(1)であるとするなら、何と云うのでしょうか。離婚は必然的に許すことが出来ない間違いではないと云うのでしょうか。離婚後に結婚することは、有益で合理的な契約が生まれる結婚であり、美德がない訳ではないと云うのでしょうか。少なくとも不幸や悲しみや病気であるにも拘わらず、誠実な心は何よりも美しくさえあると彼は何時も云うでしょうが、離婚することが良いとは言わないでしょう。単に、或る場合には離婚が許されると云うだけでしょ。そして、離婚しないことが最良であると何時も云うでしょう。世界中の人々がそのことについては意見が一致しています。神は何も生みませんでした」。

(一九〇八年一月三十一日)

(1) 〈神も不要、主人も不要〉は、アナキストの標語であった。

〈歴史〉は、政治家と取巻き連中によって書かれて来ました。一人の人間の計画が国民の運命を変えることが出来ると信じられているように見えますし、それを証明しようとしています。それは殆ど広く言われているかのようですし、一人の人間が七階から通りへ落下する時、彼が感じる恐怖とは速くなく、ゆっくりと落下して行くようなものです。

私が〈歴史〉という大嘘つきを全て本能的に嫌悪し始めた時、私は大変に若かったです。若い王や悪しき忠告者たちは間違いを犯します。老いた王はそれらに報います。宮廷を変えます。亡命者を取り立てます。大臣を更迭したり召還したりします。王朝としての同盟があります。交渉があり挑発があります。実際にこれらの意味のないことは、国民にとっての本当の歴史になり得るのでしょうか。

我々が多少なりとも大変に強い幻想を持っているために、その犠牲になっていると私は敢えて言います。その原因は分かり易いもので、過去は今ではもう存在しないということです。その上、イマージュは本の中にしかないということであり、このイマージュは歴史家たちによって作られた来たということです。〈歴史〉は彼らの偏見を考慮して証明しているのです。何故なら〈歴史〉は偏見が作った話以外の何ものでもないからです。〈歴史〉のもつ記録とは何でしょうか。それは言葉です。何時も言葉であり、一人の王の言葉です。一人の大臣の記憶です。戦に勝った將軍の弁護の言葉です。失脚した家臣が書いた批判文の言葉です。これらの話の中で意志的に嘘の部分が捏造されると、更に高慢な嘘として残るでしょうし、それが全くの真相であるのが殆どです。彼らは柔軟な楽観主義者であり、皆が事件の匂いを嗅ぎつける術を知っていますし、その後を追いかけて止めることが出来ないのを望み、その望みが自分の肉体よりも多くが話の中にあると信じています。彼らは偉大な肉体の中の脳のように、謙虚さを自分に与えますが、私たちは彼らよりも本を読みませんし話も聞かないために、国民は何時も一人とか二人とかの人間に従って来たと最後には信じて仕舞います。

地質学者たちは賢明になっていました。どうしてなのかが分かっています。彼らは地球上の今日の変化を殆ど研究し始めていました。水の活動や地盤の隆起や沈下です。そして、現在の事象に過去の事象を蘇らせます。歴史家も同じことを行います。現在の変化がどのようにして生まれ、如何なる状態に依存しているのかを先ず理解します。その時、少なくとも彼は古い文書や侍従の繰り言を公平に判断することが出来ます。

ノルマンディー人の農民を調査してご覧なさい。素直な頭で本を読もうとしてご覧なさい。彼らの愛情や興味や意見が、行為と共に如何に満足し得るものであるのかを見抜いて下さい。そこには現代の歴史の一頁があり、各人が一人の王と同様に重要であることを良く知って下さい。その兵士の怒りが戦争を起こすのです。

(一九〇八年二月一日)

## 九十四 イギリスの荘重さ (POMPE BRITANNIQUE)

勅辞、白地黒斑のアーミン模様紋章、枢機卿の緋色の衣、冠、別世代の装飾や習慣が意味しているのは何でしょうか。注目すべきことは自由に関して最も長い経験を持つイギリス国民が、まさしく従属の習慣というものを最も細心に持ち続けている者であるということです。恐らく、何らかの合理性があり、宮廷で着るコートの下には沢山の合理性が隠されているのです。

私は或ることに気付いたのですが、人間が野心を持って高慢になればなる程、権威の徽章を軽蔑します。謙遜家たちは緋色の衣の下に隠れて、自分自身でない程に素晴らしいと思える服装で、子供のように陽気に散歩します。どんなに驢馬が聖遺物を運んで過ぎ行くのを私たちが見ても陽気です。余り笑ってはいけません。人が言う限りでは、彼らは驢馬ではありません。彼らは、自分たちの心の裡の感情に反して、外見を装っても尊敬されることを単に想像したいだけであり、恐らくそのことに少しは価値があると考えています。彼らの習慣は甲冑のようなもので彼らを支えています。結局のところ、恐らくそれは有害であるよりも有益です。

実際に実力があると感じている人間が、兎に角、習慣に何の義理立てもしたくないのは事実です。彼は徽章がなくても認められることを強く望み、素裸で喝采されることを強く望みます。ナポレオン一世は灰色のフロックコートを着ていました。もし栄華を公式に回復していたなら、その後の機構には匙を投げたくなっていたでしょうし、大変に良く糊の効いた昔の服装を着ていれば全く孤独になっていたことでしょう。今日でもあなたは、力があって計算高い人間が上着を着てポケットに両手を入れて、勲章を受けないのを認めます。

イギリスの栄華も、この様にして解釈することです。それは人間を苦しめながら機構を崇める方法であると思います。若い娘でも青二才でも老人でも誰でも構わないから彼らに与えてご覧なさい。彼らはその中で王になるでしょう。このコートは人間が隠れるには余りに豪華です。強い国民は何時も偉大な王を持つとは、もう何もはっきりと言っていません。そのコートがそのことを示しています。お前は王であるから強いのです。灰色のフロックコートや小さな帽子は次のように言っているようです。お前は強いから王なのです。従って、宮廷のコートを着ないことは半分しか利口ではありません。力や富は国民から王へ行き、王から国民へ行くことはありません。〈イギリス〉は決して主人に喝采しません。自分だけの力に喝采し、劇場にいる王の両肩の上を越えて広がって行きます。

(一九〇八年二月三日)

## 九十五 戦争と平和 (GUERRE ET PAIX)

軍隊や戦争に関することは、憤然と議論されて来ました。誰かがその話を始めると、全体に広がって行きました。その途端に騒動を認識して、全体が沈黙します。彼らは微笑しながら、好感を持ってお互いに見つめ合います。何故なら人間を憎むのではなくて、少しずつ意見を戦わせることを覚えたからです。その時、或る賢者が言いました、「今は、誰も平和を愛していません。今は、世界中が戦争を愛しています。そうです、あなた方は皆良い軍人です。主義主張が正しければ、最早やるべきことしかないと言っています。大変に強く心を打つこととは、板に釘を打ち付けるように、行為に思想を加えるためのものです。あなた方は平和と戦争に議論が分かると信じていますが、そうではありません。実際には正義と不正についての議論をしているのです。あなた方は各人が理想を思い描きますが、それは何よりも良く生きる方法です。そして、あなた方の結論は何にでも理想に向かって走らなければならないことで、必要とあらば乱暴に押しつけがみ潰して自分の胸で柵を作る人々もいます。テントの中で熟考する残酷な指揮官のうち、或る者は何時も征服することや何でも力尽くで手に入れるために西へ行くべきであり、別の者は東へ行くべきであると言っているのが私には聞こえるように思えます。或る者は軍隊を滅ぼしたがっていて、軍隊に対して軍隊を招集することを話しています。別の者は本当の原因があることを信じていると言いながら、軍隊を没収した人々の將軍になりたがっています。それに成功するために、軍隊を再び招集することを話しています。

従って、あなた方は何時も〈神〉の審判を受けていなければなりません。あなた方は議論の衝突をじりじりして耐えています。軍隊というものが考えるのは、説教は余りに長く続いているということであると、受勲者たちは言われて来ました。あなた方は次のように言います。全てそれは何も導きません。一列に並んで従いましょう。戦いましょう。正義がある処に従って良く見るようになるでしょう。友人たちよ、古い方法は世界と同じ位に古いのです。人はお互いに戦います。人は死者の数を数えます。人は生者たちを集めます。そして言います。今後はここに法律があります。ここに正義があります。ここに正しい資産家と正しい国境があります。トランペットを鳴らしなさい。騙されたと気づきながらも人々が繰り返すのは、廃墟の上に建て直され始める蟻の執拗さのようなものです。神は眠っていて、その上空にいると恐らくあなた方は信じています。武器の音に目覚めて、最後にはその力をより大きな正義に与えることを期待します。

経験は大変に長く続いて証明が行われる、と私はあなた方に言います。決して神はおりません。上空は空白です。神の力は盲人や聴覚障害者のもので、眼に見えませんが聞こえません。神の正義は、そんなにも遠くにはありません。もしも神がいるとするなら、それはあなた方の心の裡にあります。それ故に人間でいて下さい。あなた方の観念を捨てることに慣れることです。正義は大空から、冠のように力を持った頭に降りて来ません。正義はどのように生まれるのでしょうか。私には分かりません。少なくとも私が知っていることは、都市は市民のためにあるということだけです。それ故に一人ひとりが働くのは、正義と平安が人に与えられるためであり、何よりも自分自身が正義で平安であることです。そこに身を委ねなければならない戦いがあります。

やらねばならない革命があります」。 (一九〇八年二月十三日)

にわか雨が降った時の空のように、男の気分や女気分も変わりやすいものです。非常に学識があつて教養のある友人が、昨日私に言いました。「私は自分に満足しません。私は仕事やランプ遊びから気がそれると直ぐに喜びから悲しみへ、幾つものニュアンスが通り抜けていく一寸した沢山の考えが私の頭の中を駆け巡りますが、それは鳩の喉がめまぐるしく変わるように早いものです。それらの考えの動機は手紙を書くことであつたり、乗り遅れた市内電車のことであつたり、大変に重い外套であつたりしますが、実際の不幸を齎すものとして極めて重大なものになります。私は理性的に考えますが無駄です。そして、それらは全てが私とは関係がないだろうと分かってきます。でも、私の理性は最早、水に濡れて湿った太鼓のように鳴り響くことはありません。一言で言えば、私は少しノイローゼになっているようです」。

大袈裟に考えるのは止めなさい、現実を理解するようにしなさい、と私は彼に言います。あなたのような状態は誰にでもあることです。理性的であること、自分のことを必要以上に考えることはあなたを不幸にさせるばかりです。あなたが美しいと感じる時は何故か、あなたが悲しいと感じるときは何故か、を理解しようと思うことです。そして、あなたは自分自身に腹を立てますが、それはあなたの喜びや悲しみが、あなたの認識している動機からでは説明することが出来ないからです。

実際に、幸福であつたり不幸であつたりする根本の理由は、推し量ることが出来ません。全てが、私たちの体とその機能の影響を受けております。そして、緊張から弛緩へ、弛緩から緊張へ毎日移行している最も丈夫な組織体としての肉体があり、食事をしている時、歩いている時、勉強をしている時に何度も繰り返えされ、天気によつても気が張つたり緩んだりします。あなたの気分は上昇したり下降したりしますが、それは波間の上の舟のようです。灰色の中に幾つもの色彩を見ることは、尋常ではありません。忙しければ忙しい程、人はそのことを考えたりしません。しかし、考える時間が出来るや否や、人は熱心に考え、馬鹿げた考えが群を成してやつて来ますが、それらの考えが譬え結果であつたとしても原因であるとあなたは信じます。鋭敏な精神は、悲しい時は悲しい考えを、楽しい時は楽しい考えを常にたつぷりと嗅ぎ分けます。それと同じ考えが、屢々両方の目的で利用されます。病気の身に成っていたパスカルは、沢山の星々を見て怯えていました。星々を見ながら経験した厳めしい戦慄は、恐らく自分の窓辺で風邪を引いたことによるのでしょうが、パスカルには気付きません。他の詩人なら、自分の体調が良ければ、女友達に話しかけるように星たちに話しかけるでしょう。そして、二人の詩人は星空を無上に美しいものとして語るでしょうが、疑問には答えようとしません。無上に美しいものとして語るだけです。

人間が情念を所有しないことはあり得ないでしょうが、賢人が自分の魂の裡に幸福な考えが広がって行くようになると、情念は隅っこの方で小さくなっているとスピノザは言っています。しかしながら、困難な道を歩むことなく、人は自分のイメージで音楽や絵画や話術のように、計画的で人為的な幸福ともいふべき大作品を創ることが出来ます。しかし、それは私たちの憂鬱



を比較的ちっぽけなものにして仕舞うでしょう。社交界の人間は、些細な義務のために自分の肝臓のことも忘れて酒を呑みます。私たちは自分が真面目に有益な仕事をしていても、この上なく利用されていないと恥じるようになります。自分の書物でも友人たちでも同じです。しかし、多分それは良くある間違いであり、その結果は重大なものとなります。価値あるものに額面どおりの関心を示さないようになって仕舞います。私たちはそれ等の書物や友人たちを当てにしているのです。人が心から望んでいるものが、時には偉大な芸術の意欲になるのです。

(一九〇八年二月二二日)

## 九十七 婚約期間 (FIANÇAILLES)

自分の結婚を考えると、人は先ず生活を変えます。そして、それは大変に自然です。不幸になることは、言葉遣いや考え方や性格を殆ど同時に変えることで、何時も信じられない位に早く人間の本质を変えて仕舞います。上辺を取り繕うこと、つまり自分自身を半分騙し、屢々他人を全て騙すことも理解することです。

従って、言い訳になりますが、婚約者から夫に成る人々には誠実さが有利に働かないこともあると言わねばなりません。そこに支配しているのは、正統を自認している胴衣を着た神学者たちです。彼らが予め知っていることは、カンマを付けて区別するのを除いては、実現可能なあらゆる状況において非の打ち所がない婚約者になることであり、それを言うことです。その彼が何か異端のものを支持するのに何よりも疲れるならば、直ぐに不平等な戦いを諦めます。そして彼が言うことは、自分で言いたいことを人は望んでいるということです。直ぐに彼は思考したことを信じます。彼の正統そのものは記録され、繰り返し言われ、厳しく吟味されて、胴衣を着た神学者たちが次から次へと人の心を惹きつけて行きます。「完璧です」と最も厳格な人々は言います。あなたは劇場などで何度もこの喜劇を眼にしました。ところで友情というものは、実際よりも良く見て貰いたいと思うことと区別が付きません。何故ならそれは争いではないからです。もしもその時、敵を欺いたならば、勝利を手に入れて何時までも優位でいられるからです。でも結婚はそうではありません。長い間、相手を欺くことは不可能です。給仕としては立派でも、人間としては偉大でないとするれば、そういう平凡な人間が口笛でやじられることなく、女性の前で悲劇の英雄を演じるのをどうしてあなたは望むのでしょうか。

それを演じ始めるなら、直ぐに出来る限り簡潔で透明に分かり易く演じなければならないでしょうが、結局のところ約束する以上のことを行うのであるなら約束する必要は殆どありません。しかし、風習は決して許されないことにも生まれます。殆どどの家庭にも不文律があって、それに従って一人ひとりが、家族を楽しませたり喜ばせたりするためには嘘もつきます。思いやりで整えられた会話の中に真実の言葉があり、それは一種の醜聞のようなものかもしれません、少なくとも如何にすれば人生が変わるかを知っている両親や祖父母の眼よりも、婚礼ナイフの犠牲になったイフィゲネイア (1) の眼から見ればそれ以上です。

従って、それは必然なのですが妻は夫を学び、自分の魅惑を少し失う度毎に経験を積むのです。神が金色の粘土で創られているのを女性が発見する間に、夫は経験に次ぐ経験で神の誕生を理解しますが、女性には無知であり、女性も自分を知りません。それ故に結婚というものは一年ごとにやり直すべきものです。そして、新しい婚約期間はそれまでよりももっと恐ろしい大変な試練となります。

(一九〇八年二月二四日)

(1) ギリシア神話のイフィゲネイアは、ミュケナイ王であるアガムノンの娘。女神アルテミスの怒りを鎮めるために、父の命で人身御供になるが女神に救われる。



## 九十八 ソクラテスの勇気 (LE COURAGE DE SOCRATE)

人々が兎のように逃げていた間、アテネの人々が戦っていた事件の中で、たった一人で名誉ある隠遁生活に入ったソクラテスの勇気を誰かが誉め称えました。ソクラテスはその称賛を聞きながら、笑い出して言いました。「私が勇敢であるとあなたは信じている。実際にはその時私は、逃げ回っていた人々よりも勇気があった訳ではない。それというのも私は、人が敵に追い詰められて背中を的のように見せる時、武器を捨てることは危険であり、酷く軽蔑されるに違いないと見做しているからだ。私にとっては、追跡して来た連中と正面から向き合って、両眼を開けて、眉をひそめ、最善を尽くそうとする時、恐怖が背中を押しているようだ。そして、自分の楯の背後で他の防御がないとしても出来るだけ良いものを隠している者を私は理解しないが、両眼を瞑って渦巻のように混乱した中に身を投じる者よりも勇気がある。彼ら二人のうち、一方の人の方が巧みな人であると少なくとも私は理解している」。

勇気についてのこの奇妙な話を聞きながら、若者たちは痺れたようにそこに取り残されて立っていました。彼らは何時もの観念が頭から飛び去って行ったように思われました。ソクラテスの微妙でとらえ難い話を聞くと、殆ど何時もそのような結果になるのでした。従って〈シビレエイ〉という異名が付けられていました。

しかし、生真面目な人間が立ち上がって、ソクラテスに拳を突きつけて叫びました。「あなたの行いが生まれる花々や果実を火に投げ入れる場所は、何処なのか。何故あなたは自分を最も恥ずべき最悪の徳に水準を下げるのでしょうか。だったらあなたは単純で素朴であるべきであり、あなたを褒める人々に話をさせて置くべきである。何故ならその町は、少なくとも善き行いを必要としていないからだ。熱狂的な話は、やはり彼には有益である。何故、洒落を言うのか。何故、裏の話をするのか。あなたは、人々が城壁の上で戦っている間、女や子供たちと一緒に地下室の奥に隠れに行く臆病者たちに対して、如何なる言い訳も理解しないのか。ソクラテスよ、あなたはその時逃げて、今日の話をしなかった方が良かったのだ。あなたの謙遜は皮肉っぽく、その勇気は私たちに与えた善よりももっと悪いものを生んでいる。あなたは何事も良き市民として行動するが、尊敬する気持ちがなく思考し、話をする。あなたの知性は、あなたの美徳というものを悪くしている。あなたは神に従うが、神を信じていない。あなたには勇気があるが、勇気を素晴らしいと思っていない。あなたは祖国のために平然と死ぬだろうが、逆説の一つを主張するためにも一生懸命になるだろう。あなたは犬に骨を投げるように、愛もなく私たちに献身するのだろう。あなたの数々の美徳は、その美徳を無視している。〈神々〉の正しい怒りを恐れてくれ」。ソクラテスは底知れぬ沈思黙考に陥りました。既に、監獄の中では、奴隷が毒人参を粉に砕いていました。

(一九〇八年三月一日)

## 九十九 友人たちの正義 (LA JUSTICE A DES AMIS)

---

モラリストは大急ぎで行きました。「不幸なことにも、不正は何時も罰せられていないと認めなければならない。市場で不正が広がっていることは大変良くあることだ。その同じ不正により正義が無視されている間に、金持ちや権力者や名誉を得た人間になることも大変良くあることだ。少なくとも、正義が与える内面的喜びも斟酌しなければならないし、それは何か自分を満足させるものであり、不安にさせるものでもある。そこには不正には決して分からない感情がある」。

人間嫌いの男は言いました。「しかし不義の人は不正が大嫌いだと私は思わない。全く反対で、彼は何よりも不正によって成功したことを自慢することが屢々あると私は思う。そういうことによってしか得られないから自慢するのであり、少なくとも自分自身の実力よりも法律や裁判が証明してくれるのである。しかし、自分の仕事に釣り合わないと思える利益を抜け目ないやり方で手に入れたならば、その時は彼ら自身が驚くようになる。訴訟人は、不利な裁判に勝った時しか大して満足しない。だが、国の高い地位にいる者たちが、自分の友人に不正な利益を与えさせて喜んでいるのを屢々私は眼にして来た。そして、それは自然なことでもある。何故なら正義よりも権力が愛されているからである。そして本当のことを言うなら、正義は弱者にしか愛されない」。

賢者であるモラリストは言いました、「正義は最早そんなことを望んでいない。何故なら世間の人々に愛されるだけで十分であるからだ。眠っている間、つまり人生の半分が弱者でない人間などはいない。暴君は領地から財産の全てを手に入れることが出来るが、安眠を手に入れることは出来ない。安眠は最良の財産であり、十人の人間よりも強い人間はいない。別な言い方をする。盗みを保護する泥棒はいない。本当の話無しで済ませる嘘つきもいない。何故なら不正は通りすがりに不正を働くのかもしれないし、通りすがりに不正であることを喜んでいるかもしれないからだ。それでも正義と見倣す必要があり、正義に導くことは大変良くあるが、取分け皆は正義であると是非とも言って欲しいのである。何故なら不正はどんなに例外があっても、実際には例外は必要ないからだ。例えば嘘をつく嘘つきは決して信じられない。そして、もしも全世界の人々が何時も嘘をついていたとしても、最早誰も騙されている訳にはいかないのだ。それ故に正義には何時も友人たちがおり、信じられない位に誠実で率直である」。

(一九〇八年三月六日)

若い作家の初期エッセイは、日の出の勢いのように勝ち誇っているように見えたが、差し当たり二十五スーの定食を食べて、既婚者の立派なアカデミー会員と知り合いになり、文壇で高い地位に就いていました。その若い作家が長い牙と法外な野心を見せた時、そのアカデミー会員は結局のところ良い人間だったのであり、隠者になる方法を教えたがっていました。

彼は若い作家に言いました、「私が知る限り、あなたには成功するだけの才能に恵まれている。つまらないものを書いて、全然人に感動を与えないあなたを見るのは悲しいことだ。さあ、どうすれば名誉と財産が手に入るのだろうか。あなたは意見を出し惜しまないでいるし、あなたと同じ位に貧しい人々しか理解していない。砂の中に種子を蒔いているのだ。その後で、あなたは運のせいにする。しかしながら、名誉と財産が何処にあるのかを見付けることは難しいことではない。輝かしい連中の後について行きなさい。そこには約束されたあなたの土地がある。何も恐れることはない。あなたは苦もなくそこに這入れるだろう。それに相応しい服装をして、只前進すれば良いのだ。借りたお金を返して、安らぎを手に入れるのだ。文明社会には精気と若い才能ある人々が不足している。あなたの本は感嘆されて愛されて読まれることだろう。あなたは結婚して、それなりに金持ちに成るだろう。冬になればエジプトで暮らし、春にはロンドンだ。若者たちは、あなたのネクタイやチョッキを真似して身に付けるだろう。自惚れが強いように見える女性たちのことは、私には話せない。何故なら、あなたは十分に彼女たちのことが分かっているからだ」とアカデミー会員はつけ加えて言いました。

——歩きましょう。約束された土地に向かって歩きましょう。しかし、お金にならないなら、何にもならないと私は自問する。全てがお金にならないで、私は何の利益があるのでしょうか、とその若い作家は言いました。

——あゝ、大したことはない。洗練されていることを、あなたは要求されるだろう。あなたはそんなことを考えないうちに、残りの要求もやって来るだろう。私は、金持ちや貧乏についてのあなたの考えを知っている。公平であることを考えていたことは私も同じだ。あなたもお分りのことと思うが、重要なのはそれらの相反する考えが同じ重さでバランスが取れている処まで、もう少し考えることだ。あなたがそうなった時にアイロニーの真価を知るだろうが、それは賢明な礼儀正しさであり、そのような盛装をして着飾ったあなたの若々しい自由な精神は、サロン中に披露されるだろう。その後で、サロンはあなたを教育するのを引き受けるのだ。本当の賢明さは、金持ちと共にあなたに齎されるだろう。司祭が言うように、私はあなたに言う。先ずは実践せよ。そうすれば信仰はやって来る。信仰に値する敬意を全て良く理解するには、強さを訓練しなければならない。あなたは伝統と階級制度（ヒエラルキー）を正しく判断する地位にいない。先ずは蜂蜜の味を知ることだ。そうすれば、あなたは蜜蜂の群を愛するようになる。やらなければならないことが分かったならば、良く生きることは良く考えることに通じている。それは一大臣の歴史以上であり、アカデミー会員全員の歴史である」。

その時、瘦せたその若い作家は、太った作家に寓話の中の犬を認めていました。その犬は首輪

を付けて生きているのです。狼は言いました、「繋がっているのかい？ それでは行きたい処へ走って行けないの？」。狼は嬉しそうに跳ね回り、消えて行きました。

(一九〇八年三月九日)

## 百一 蜜蜂人間又は全速力人生 (L'HOMME-ABEILLE OU LA VIE A TOUTE VITESSE)

現代の基本的な間違いは、あらゆることに速さを求めていることにあると思います。単に機械を速く運転して製品を増産することよりも、もっと速く多くの石炭を消費して貧しくさせるばかりでなく人々を疲労させ、経済状態のこの速さによって活発ではあるが蜜蜂の愚かな行動へ、直ぐに導かれていくことでしょう。

彼らのことを見守って下さい。彼らはその流れの中で起き上がります。身体を水で洗って、コーヒーを炒れて胃に流し込みます。階段を走ります。通りも走ります。彼らは突撃するように市内電車に乗り、エンジンが唸って動いている路面電車の触輪から炎がパチパチと出ている間、新聞を大急ぎで貪り読み、まるで事件を再現したがつているかのように見えます。五分間で六頁も読んでいました。彼らの眼は一度に十行をまとめて読んでいたようでした。その間に、路面電車も交差点から交差点へ何本も通り抜けて行きました。きしむ音を立てて停止しました。速度が速ければ、その分速く止まらなければ意味がなくなるからです。彼らは電車から降りて職場へ消えて行きます。直ぐに仕事をやりに行き、タイプライターを打ちます。何故ならペンでは余りに遅いからです。大声で電話で話します。何故なら手紙では余りに遅いからです。夕方までこの様な調子であり、翌日も同じです。

しかしながら、理解すべきことは絶えずありました。それというのも季節は、怠け者の王の時代のようにゆっくりと規則正しく進むからです。今朝、明るい太陽が町の屋根を金色に染めていました。通りを閉じ込めている丘々は青い靄に包み込まれて、俄雨で濡れた石畳は乾いていました。水溜まりが、ダイヤモンドのように光輝いていました。哲学者のような顔をした犬が、小刻みに速く歩き、尻尾は上を向いていました。鳩はくうくう鳴き、猫は樋に道を探していましたが、それは雨が降った後を歩く若い恋人のようでした。しかし、弾丸のように唸って目的地に向かって行く蜜蜂人間の彼らに、何が見えていたのでしょうか。

彼らの眼はもう事物を見ていません。彼らは、新聞や本の中に書かれている事物の概略しか見ていません。人間たちは世界を丸薬にして飲み込み、科学を錠剤にして飲み込むのです。最早話をしませんし、暗誦もしません。言葉は貨幣のように打たれ、同じ様に流通します。熟考しようと思う者は、食料品屋のカatalogを捲ったりしないで、葡萄酒を小麦に交換したいと思えるくらい子供のように見えます。準備された回路で私たちは走って考えます。もしも人間的生活を生きたいのなら、もしもこの世界が如何に作られているのかを知りたいのなら、乞食のような生活をしなければならないだろうと私は思うことが良くあります。

(一九〇八年三月十七日)



## 百二 ゾラとバルザック (ZOLA ET BALZAC)

ゾラの作品について言うべきことがあります。ブルユンティエール (1) の後に出たバレス (2) は、貧困のことしか言いませんでした。欲求を起こすものを書くのは多分危険です。しかし、きちんと服を着た情熱の叙述も多分危険です。それ故に道徳を残して置きましょう。そして、真実を論じましょう。

ゾラは、歯車を回したいと思う機械のように人間社会を理解しました。男たちや女たちの噂を聞くと、基本的に彼らは心と知性を持っていて金や権力や名誉を愛し、恋愛感情は取分け思い上がった激情によって揺さぶられた感情と観念の交換から成るものと信じられているのかもしれませんが、それは何でもありません。そのことは欺瞞でしかありません。彼らの情熱は服装のようなものです。服の下は素っ裸で、動物と同じ様に望んでいます。それ故に、もしもアカデミーや政治討論や株式取引所やサロンや仕事場で行われていることを理解したいのなら、寝室へ這入り込まなければなりませんし、ランプが何時ものように消されるその瞬間に、まさにランプを灯さなければなりません。

そのことが行われるならば、習慣という一枚の絵画は感情を害することなく真実になり得ません。そして小説家が示している鏡の中に私たちは自分自身を見詰めますが、顔を赤くするのは必然的です。

それは困ったことです。困ったことでないとしても、そう言わねばなりません。余りに長い間、人間は上品な嘘をついて生活して来ました。そして、それらの嘘は不正に仮面を付けることしか役だって来ませんでしたし、それ以上に不正を悪化させて悪くし、何も真実を言う危険を冒しません。顔を赤くする羞恥心は決して同情に値しません。それをもっと良く見てご覧下さい。監獄の中で死んでいった無実の人をその儘何も出来ないのと同じです。

もしもそのようなことが起これば、ゾラの作品は全て曙の光で照らされることでしょう。少なくとも彼は間違えたと思われています。それは多分、世界中の人間を殺したいと思うことではありません。それは多分、情熱です。情熱とは何でしょうか。それは観念と怒りと欲望が混合したものであり、欲望を変えることが出来ますし、殆ど欲望を無効にすることも出来て、人間だけの強い情熱、吝嗇、野心、虚栄心、嫉妬、狂信によって動物的狂気に替わります。人殺しの情熱の歴史において、物質的欲望は大したことではないと言うのは恐らく本当です。一般に女性を愛する者は、金があれば愛している女性よりももっと美しい女性と一緒にすることが出来ます。しかし、自尊心やその他の感情は知性に支配されており、偏見は欲望よりも屢々もっと強い力を持っています。そのことを承知で議論した方が良いでしょう。そして、その点で言うのであれば、バルザックはゾラよりもっと真実を言っていると言えます。

(一九〇八年三月二三日)

(1) フェルディナン・ブリユンティエール (一八四九～一九〇六) は、「両世界評論」誌の主筆で、文学史においてジャンル進化論を唱えた文学史家で批評家。

(2) モーリス・バレス (一八六二～一九二三) は、自我の探求から国家主義へ向かった作家で政治家。



### 百三 十三日の金曜日 (VENDREDI TREIZE)

---

今月の三月十三日は金曜日でした。多くの人々が恐らく、旅行や結婚式や取引の契約をこの日にするのを避けていました。宝くじへ走った人々もありました。何故なら十三日と金曜日という不吉が二つ重なったことは、賭けをする人には有利と見たからです。

予想することについて色々な考えを持っている人々の間で、自分の考えを支えとして事に当たれる強い人は非常に少ないです。彼らの多くはその考えに十分な根拠がないこと、つまり金曜日と十三日という二つの記号の一致は、暗黙の約束や不自然なことの結果であると理解しかねません。例えば、今年を出鱈目に選ばないで他の年であったならとか、二月を一日伸ばして二九日にしたなら、金曜日が十三日にはならなかったでしょう。それでも太陽、月、惑星、星々、風、雲、潮そして水の流れは、その日に関係なくあるべくしてあったでしょう。

しかし、ここでは理屈が重要ではありません。十三日の金曜日は素直に無視出来ますが、それでもそのことを考えると或る種の不安を感じます。そのことが齎すのは私たちの希望であり恐怖心ですが、それらは理性の働きよりも寧ろ観念の連合によって多くが規定されます。その上、私たちに決して苦痛を与えなかった人物が、私たちの記憶と不吉な出来事に結びつくと、悲しい出来事として理解するばかりです。如何なる理性も、この感情のメカニズムに対抗出来ません。私は記憶が現れるのを妨げることが出来ません。記憶を取り除くことが出来ませんし、悲しい出来事の時のマントは記憶を思い起こします。

迷信についても事情はこの通りです。そのような迷信の場合がどんなに下らないとしても、悪い前兆であると言われると、その様な場合と悪いことが同時に起きる可能性を考えざるを得ません。しかし、私は反抗します。私はこの不条理で馬鹿らしい関係を打破したいのです。力強くそのことを考えることが、正しい行いです。従って私は強固になって関係を断ち切りたいのです。というのも注意力は習慣的に行っているものをもっと強くして、普段は私たちの思考に続いて行く小径をもっと深く掘り下げることであるのが分かっているからです。

この様にして私の考えを不吉な前兆に当て嵌めれば当て嵌める程、前兆の観念はその後に悲しいイマージュの行列となって続いて行くのがはっきりしています。私は、起こるべくして起こる事件を良く疑うようになります。しかし、それは現在の私の悲しみを癒やすものではありません。食卓が十三人にならないようにしたい人々は恐らく、現在の陰気なイマージュを追い払うことを考えて、来たるべき不幸を避けることは考えません。そこから解ることは、間違った考えでも力を持つことが出来ることであり、考えが間違っていると解っている人でも事情は同じです。

(一九〇八年三月二四日)

フランスは眼鏡をかけた医者たちで取り囲まれていて、彼らが重々しい表情で頭を左右に動かすのは、触診したり気になる病人を聴診した後で、独り言を言います。「危篤状態だ。長く保たないだろう」。

医者たちは、病人であれば十分に愛しますし、先の尖った帽子を被った病人たちの一人ひとりが丸薬の缶を売りつけられているのを私は良く見ます。しかし、医者たちの中にも誠実な人が何人もいることを私は知っています。彼らが汚れて真っ黒になる原因は何処から齎されるのでしょうか。それがやって来るのは、監視所を間違って選択したからです。

彼らは、光に照らされて飛ぶ蝶のようにパリ中を走り回っていました。そこで本を読みます。最新の小説も読みます。彼らは役者のル・バルギーとかレジャーヌとかギトリーが演じる芝居も観に行きます。彼らは或る編集室で待ち伏せることもあります。彼らは出版して有名な本屋で新刊書の山を作ろうと熱心に隙を窺っています。彼らは議会にも出席します。副大臣と一緒に食事もします。つまらないピアノを快い演奏にする才能豊かな作曲家に拍手をしに行きますし、その間は熟年女性たちが若くなる時でもあります。現代のモラリストはこれらの昆虫を狼と考へて、激怒した文章を書きます。解剖を行っていた階段教室から出てきた医学生が次のように言っているのが聞こえるようです。「人間は腐敗するしかない」。

友人のフランスは偉大です。もしも私がお前にそのフランスの場所に美しい夜を与えたなら、そしてもしもお前を小鳥たちが沢山いる小さな森の端にある小さな丘の斜面に降ろしたなら、そこからはゆったりと流れる河が見え、霧に包まれて町は煙っていて、大地は犁で耕されて黒褐色をしていて、お前は美しい朝を毎日見るでしょう。枯れる花瓶の花とは違う花を見るでしょう。実を結ばない花の情熱ではありません。そうです。恐らく、お前は恋人たち、野心家たち、嫉妬深い人たち、酔っ払いたち、そして畑の中の哀れな人たちを見るでしょう。お前は青々とした麦畑や陽気な子供たちの群も見ると良いでしょう。それというのも人間や事物の多くは変わらないからです。そして太陽が回る限り、労働者たちは太陽の後を追って付いて行きます。

しかし、そんなにも話を飛躍させるのは止めましょう。大都市はお前が聴いたコンサートや夜の時間を忘れる催し物とは別のものを与えます。それ自体が古くからある研究所で、全てがかび臭く、沈む夕陽は後光のように見えます。お前は、今は大衆の流れに従いなさい。ビュット＝ショーモン公園(1)まで行くが良い。お前は最高のものを見るでしょう。市内電車が唸りを上げて行く通りから二歩目に建つ七階建ての家の真ん中で、お前は密生した短い草で覆われた丘の頂上を見ます。その頂上には全く手つかずの雛菊の花が咲いていて、古代ケルト時代のドルイド僧(2)がいた時代のようなようでした。

(一九〇八年四月五日)

(1) パリ北東部の十九区の高台にある公園で、第二帝政時代に整備された。

(2) 古代ケルト族の祭司で、教育や裁判にも携わった。



奇跡とそれを信じる人々がいることは驚きです。しかし、あなたは自分の周りを見て下さい。魔術師が重い肉体に触れることなく持ち上げる力があることを熱心に議論されます。でも誰が議論するのでしょうか。無知な者たちではありません。子供たちでもありません。職業によって一つの芸当を何回も上手く行うのを覚えた人間は、先入観、自分の情熱、他人の情熱、そして予見出来ない原因による行為を信用しないことを覚えます。

手品師が一瞬の動作で籠もろとも生きた鳥を消したり、手に持っているシチュー鍋から生きた鶏や兎を取り出したり、あるいは袖をまくり上げた後で長さ十メートルのスカーフを観客のポケットから取り出すのを見ると、出来事の本当の状況が分からなくなるのは明らかです。少なくとも誰もそれらが奇跡であるとは言いません。何故なら普通のやり方で手品師は動いているのであって、単に上手に隠すことに気を配っているだけであると誰もが知っているからです。

精神を呼び起こしてこの世とは別の世界の徴を探す者たちは、この様に考えて上手く自分を守ります。まさしく彼らは慎重であることを信用しません。そんなことは望みません。彼らは奇跡を望み、希望し、期待します。奇跡が起きないようにする時が幸せです、その時は人間の運命、最善の正義、そして私たちの感情の中にあるより純粋なものとしての永遠性についての考えを確信する時です。

もしもこれらの観念がなかったならば、彼らは曲芸師の演技とか手品師の業とか立派な物理学者の単なる実験を見るのと同じ眼で不思議な出来事を考えるでしょうし、証人にもなるでしょう。何故なら結局のところ、私たちが理解しない現象には事欠かないからです。その時の私たちは、時計がカチカチいう音を聞く子供に似ています。私たちは目覚めます。喜びます。見抜こうとします。驚きます。しかし、心の底まで動かされませんでした。それらは決して交霊術者を動かす出来事でないのが明白に分かるのですが、交霊術者はそれらに説明を与えます。つまり胸の中に宿っている昔の古い観念や古い夢が、何時も脳みそに蘇って来ようとしているのです。

(一九〇八年四月十六日)

ブリュー(1)が書いた戯曲作品や、浮気した妻を殺す夫を主題とした他の作家の作品は、大変に賢明です。それが残酷な懲罰であり、当然のこととして一般に論じられているように、自分を正義の味方だと思っているこの殺人者を論じなければならないのは明白です。

現在、それを原始時代の残酷さの名残と理解したいならば、余りに単純であると私は思います。私たちの情念は、結果を見て残酷になり得ます。それは珍しいことではなくて、殆ど全てが文明の間接的な結果であり、風俗の発展によるものです。お金への愛は、経済的制度というものを前提にします。それと同じ愛による暴力は、司祭にも信者にも事欠かない宗教的感情がなければ説明されません。

性的欲望には、動物の裡にも同じものを見ることが出来るように、殺人にまで行き得る激しい何かがあるのは確かです。文明化された男が自分の妻を殺すのは、多分この衝動があるからです。しかし、別なものも多くあります。都会の男の裡には、欲望はそんなにも強くありません。人間の意志は、自尊心とか恐怖心によって支えられていさえすれば、容易に勝利を収めます。自分の妻を殺したこの芝居じみた夫は、五月蠅くしているよりも寧ろ欲望に抵抗することが出来るのは確かでした。文明化された人間は、何時も大変疲れていて、そこでの美德には大変飽き飽きしています。素晴らしいこととは、情念という雷雨が大変良く稲妻を放ち、欲望が混じることもなく雷を落とすことです。強姦を企む者は自分自身の下等部分に従っているのは明らかであると私は思いますし、欲望の温度を測る温度計というものがあつたならば、人はそのことに気付くことでしょう。しかし、妻に浮気されて復讐する夫の血液や気分の流れの速さを測れたとしても、その速度計はゼロを示していることも私は確信しています。嫉妬が傷付け苛むのは心であると言われていますが、それは大変に上手い言い方です。

慈愛は一種の洗練された野心であり、それは女性の肉体を所有することで決して満足しません。恋人たちは自由に愛されたいと思いますし、自由に選ばれたいと思います。両眼を使って頭の中を読みたいと思います。誰か一人のために、一番大切な人になりたいのです。以上は欲望を如何に解釈しているか、あるいは少なくとも純潔な女性の承諾を如何に解釈するかです。女性たちは大変上手にこのゲームに合わせます。教育、品行、そして一人のために宝物として持っている必要なものは、全てがおしゃれという非凡な芸術を彼女たちに教え、快樂に異常な価値と意味を与えます。その結果、未開人が無知であるのは喜びです。陶醉した詩になります。それらは愛され、その存在が信じられ、心が安まるオアシスとなって、秘密の隠れ家のようなものになります。

一つの考えだけで男は何故生きるようになるのか、何故女は好奇心とか自尊心とか、少なくとも親切心によって時々自分の感情に少しは力を与えるようになるのか、何故であるかと言えば、女は疑うことも知らなければ、希望もなかったからで、女が与える喜びそれ自体のためにたまたま欲するからです、そのことは大変に良く知られていることです。そのようなものは演劇の源です。廃位した王の激昂を理解するには、何とか王に在位するのを喜びに感じる何らかの観念を

手に入れなければなりません。同様に、もしも私が嫉妬の結果を理解したいなら、酔い心地にさせる何らかの幸福を想像しなければなりません。その時、それは剣を振り上げる天使であって、動物ではないのです。

(一九〇八年四月一九日)

(1) ユジェヌ・ブリュー(一八五八～一九三二)は、演劇革新運動を行ったA・アントワーヌが一八八七年にパリに創設した自由劇場の代表的な作者の一人で、社会問題を題材とした。傾向演劇『シモーヌ』の最初の上演をコメディ＝フランセーズで行い、痴情による犯罪が激しく非難された。有名な戯曲に『赤いドレス』(一九〇〇)があり、一九〇九年にアカデミー会員になる。



「もしお前が人々の立場にあつて、人々がお前の立場にあつたなら、お前と一緒に人々が行動して欲しいように、お前は人々と一緒に行動しなさい」。この規範は正しいです。それは〈金科玉条〉と呼ばれていました。しかしながら全てに当て嵌まる訳ではありません。

それは自分の子供たちに厳しく言う男の言葉であり、彼は子供たちを非難してばかりいて、出来る限り間違いが起こらないように好きな楽しみを奪い取って、或る種の遠慮と共に子供たちのために持っている大いなる優しささえも隠して仕舞います。この男はそのようにして育てられて来たのです。何故なら彼は世の中で成功しましたし、この方法は正しいと信じているからです。事件が起きることは決してありません。彼は性格のことを考えません。子供は二〇歳で死ぬこともあり、父が慎重に育てて来た果実を全て無に帰して仕舞うことは思いません。彼は自分が育てられたようにして人を育てました。

司祭は、死の恐怖や地獄の恐怖の中で自分を語ります。彼は自分自身の中にある最も小さな快楽さえも注意し、それらを窒息させて仕舞います。何故ならそれらは悪魔が仕掛けた罠であるからだと言います。自分の人生をずたずたに切断して死ぬためにしか生きていないのです。ほら、そういう彼が今、福音を説いています。ほら、そういう彼が恐ろしい絵を子供たちに描いて、夜に見る悪夢の下準備をしています。子供たちに聴かせたい説教をしています。

乱暴な男は、四人の証人と二人の医者の中で、相手の胸を剣で突きます。彼がやることは自然で正しいと信じます。何故なら相手も剣を持っていて、出来るだけ有効に使うからです。「彼は私を殺すことが可能であり、私が彼を殺すことも可能だ」。

男は重さを間違えて売ります。〈金科玉条〉は全てを不快にすることはありません。彼はあなたに言います、「私は一度ならず騙された。何故なら彼がそのことをやらねばならなかった時、私は眼を開ける術を知らなかったからだ。相手は私に似ている。商売は一種の競争だ。厳格で誠実でなければならぬと良く言われているが、誰もそんなことを信じていない。少なくとも私は、そんなことを信じていない。もし私が怠慢でいるか無知でいるかしていたなら、私が騙されるのは大変良く分かっている。私は相手の同情も好意も誠実さも、商売には期待していない。私が用心しているように、あなたも気を付けなさい」。

金融業者は証券取引所で賭けをしています。殆どの賭けに勝ちます。他の人が知るよりも早く知った重要な情報によるからです。彼を見倣ってご覧なさい。「もし誰かがあなたのカードを見てから賭けたとしたら、あなたは満足していられますか？」と彼に言ってご覧なさい。彼は次のように答えるでしょう、「誰もが私のように情報を待ち伏せして待っているし、自分の手の内は隠して、私のものを見ようとしているのは分かっている。出来るものなら私の皮を剥ぎたがっている。私はそれに同意する。この闘いは公正明大なのだ」。

これらの例から、二つのことが分かります。まず第一には、大部分の人は自分の眼で見て正しくありたいと感じています。その次に、誰もが自分の行動だけは正当化されて多くの苦勞が無いようにしたいのです。モラリストという言葉は私にあなたに譲りますし、あなたの金科玉条を私

はあなたに返します。

(一九〇八年四月二六日)

## 百八 回転テーブル (TABLES TOURNANTES)

---

回転テーブルについて、今まで長い間私が信じ込んでいたことがあります。それは操作する人が指で押ししたり擦ったりして動かしていることです。そして以下は、人が行う経験以外は何も言わないのを必然とする内容で証明し得る限り、如何にして私が証明したかです。

私は次のように考えます。私たちの行動が想像力に従っているのはどうしようもないことです。例えば指を上げるのと同時に、下げることは想像するのも全く不可能です。それ故に私はテーブルが回転し始めるのを期待する時、つまりテーブルが回転するのを想像する時、うっかりして私はテーブルを押しします。立会者全員が平等に想像力を生き生きと持っていませんし、平等に固定させる能力も持っていません。それ故に彼らは、或る時は一つの動きを想像しますし、又或る時は別の動きを想像します。その結果、先駆者の震えを全ての人が熱心に指摘します。続いて、彼らの中でもっと頑固な想像力を持っている人が、その動きに一つの意味を与えますし、指の先から全ての人が見抜き、動きの概略を想像します。その時はテーブルがワルツを踊り始める時です。

以上は、私の作り話でした。それが可能だった限りでは、吟味するために私は先ずその様な動きを執拗に想像しながら、その感覚でテーブルの回転を出発させることに決めました。その次に私は、何時もそれを想像しながら自分を適用させて、指のことやその動きを、逆にすることは考えません。誠実な魔術師に沢山の悪意を与えるのがこの適用です。殆ど全ての場合に私は、想像した感覚でテーブルが回るようになります。想像力の結果によって、全ての場合に私が反対の回転を想像した瞬間に、そのテーブルは乱れ、震え上がり、停止し、屢々私が想像した方向へ新たに從って行くのでした。

私は別にこの種のことを試みたのですが、もっと決定的なのは前口上を操作した時のことでした。私はその時、目的とした前口上は大変に弱い一本の指を動かしながら、私の意に誠実ではっきりと理解して適用してくれた一人の協力者に満足することが出来ました。テーブルで同じ操作をしなければならなかったのですが、この種の体験を冷静にやれることが出来るような人を六人も見付けることは私には不可能でした。彼らが最早そのことを馬鹿にしなくなると、或る種の宗教的錯乱に襲われます。死者たちの精神は彼らの胸の中で大騒ぎをします。その時、テーブルは強い情熱に溢れます。

(一九〇八年五月二日)

日、週、月、年を数えるのは大変に簡単なように見えます。何故なら、私たちは社会の中で生活しているからです。何処へ行っても至る所で、時間を小刻みに細かく切る時計の針を眼にします。小ポケットには懐中時計があり、無意識に時間を見ます。この様にして私たちの想像力が、流れる時間から顔を背けることは決してありません。一日の各瞬間でも、私たちは何時何分なのか分かっています。そして、夜に目覚めても、時間や時刻のことを直ぐに考えます。私にはチクチク、タクタク、トクトクと音を出す懐中時計や置時計や掛時計があり、まるで何本もの糸で時間の巢を張っているようです。私の傍にある掛時計は、タペストリーの大輪の花のようであり、一時間毎に大きな音を出します。その上、十五分経ったことも私には分かります。

日々が経つことはもう少し複雑です。日々を数えるのに、懐中時計は殆ど使いません。しかし皆は数えており、その数え方は沢山あります。家計を計算する主婦は、或る種機械的に日々を数えます。というのもお腹が減ると食欲は間違いなく生じるからで、食べることや飲むことが忘れられることはありません。公務員の計算も日々を正確に数えます。それはお金という砂を流す砂時計のようなもので、流れて行くにつれて月になります。会計係は、全て帳面に日々を記載して商売をします。更に日々には記念日の名前が付けられ、記帳は数珠のように繋がって行きます。何かはその請求を邪魔するとしても繋がります。「それ故に、私たちは如何なる日とすべきであるのでしょうか」。全ての人は働き、期待し、心配して、その日に応え、そして応えが一致してその日が来ます。週の端で輝く日曜日は、灯台のように、一日一日に色彩を与えます。この様に月や年は、良く掃き清められた並木道のように、予め描かれています。

しかし、もしロビンソン・クルーソーのようであるとか、少なくとも自然の中において町の中に行かないとすれば、私たちは日々を数えるのに大変苦勞するでしょう。それというのも小石に日々の印を付けて行くのは、間違いを犯し易いからです。孤立した人間の記憶は、躊躇するばかりで迷って仕舞います。私は全ての日々を付けたのでしょうか、あるいは付けなかったのでしょうか。孤独な人間には解けない疑問です。従って彼は潮の満ち引きに時間や月を読むことでしょうか、太陽や星々や、取分け月の規則正しい満ち欠きの繰り返しは、驚く程の月々を数えています。

それ故に皆がやむを得ず学者であった時には、恐らく太陰月で数えていたのです。それ故に気象学の古い方法も、月の言葉で今でも使われています。赤い月は花にとっては恐ろしいと農家の人々が言う時、秋分の日から始まる太陰月は夜が寒くなると言いたいのです。しかし、夜を寒くするのは月であると言いませんし、そのことを考えもしません。彼らはそんなにも愚かではありません。

(一九〇八年五月五日)

## 百十 役所 (ADMINISTRATION)

---

役所は、あべこべで非常識な世界です。役職が上がれば上がる程、力がなくなり、責任は大きくなります。軍隊では、上等兵が全てを行います。事務所では、最終の発送係が全てを行います。彼らの上には伍長がいて、軍人とか市民がおり、その仕事は次の二つの言葉の中にあります。監視することと、要約することです。その上には監視する人を監視したり、要約する人々を要約する人間たちの階級制度というものがあります。

事件というものには関係があります。官僚は、十ある関係を一つに凝縮することが仕事と見做しています。このやり方によって、十の関係が一つに合併させられます。各々の独自の性質が失われます。家族全員を撮った写真を仮定すれば、そういうことが起こるのがあなたには分かります。その様にして全員が混じり合った写真からは、最早誰にも似ていない写真が生まれます。役所はこの巧妙な仕事を十回も二十回も繰り返します。彼らは同一のこの写真の乾板に何千という事件を表すようになります。つまり簡潔で優美で意味の無い頁にするのですが、偉い上司はそれを読んでサインして、演説する時に要約して言うのです。私たちはこの文体を十分に分かっています。それは制度が生んでいるのです。複数の事件を同時に記述したくなるや否や、内容の無い型に嵌まった表現に陥ります。主義主張は無くなります。

統計の美德とはそういうもので、お役所的報告書の典型です。例えば百件の火事のうち三十件は放火で、五十件は過失で、二十件は工場からの出火であると私が言う時、そういうことを私が言っても何にもなりません。何故なら放火や過失には色々な場合があり、色々と異なった原因が多くあるからです。これらの内容の無い報告書は、曖昧な法則によって表され、笑って済ますしかない上等兵まで段々と降りて来ます。

その原因を把握し処方箋を見付けるために、自分から動いて事件まで行かなければなりません。自分の仕事に精通していない警視總監は、その騒ぎに関する報告書の作成を自分で行いません。彼はそこまで走って行き、命令を出します。そして、その交差点で車が衝突するかどうかを知るために見に行きます。このやり方は少しずつ行われて来っていますが、役所ではそれに抵抗して、上司の監視と行動の間で無駄なことが行われています。以上は、管理することが難しい理由です。物事の自然な流れによれば、権力と行動は切り離せません。杓子を持つ者は、スープを作る者でもあるのです。

(一九〇八年五月六日)

我が国の〈婦人参政権論者〉について或る女性が昨日、私に言いました。「女性たちの要求は少し滑稽と思います。自立した女性は或る種の怪物なのです。その女性は生まれた儘の自然に従っているのです。彼女は保護され大事にされる必要があります。子供の面倒を見るという役割の他に、もしも彼女がそのことを幸福に思うのであれば、彼女の自然な役割は家庭を美しくするでしょうし、それは男性がそこに喜びと安らぎを見出すためでもあります。あるいはこう言った方が良ければ、それは奴隷の仕事です。しかしこの奴隷の仕事は、もし余り愚かでないならば、彼女を女王にします。説得力や微笑や阿諛や幾らかの自尊心によって支配しますが、それは彼女の最も貴重な化粧でもあります。そして、彼女には産婆とか電話交換手には決してない実際の自由を多く持っているとして強く信じて下さい」。

私は彼女に答えました、「あなたは養われている女性として話しています」。彼女は実際に安心出来る結婚をしているので、逆説を求めているのであり、笑っているばかりです。

「あなたが養われている女性であるのは本当です。ほんの僅かな持参金で、例えあなたが愚かになって彼を熱愛していなくても、男性に気に入られる術は知っていました。あなたは彼から敬意も受けていました。彼はあなたに懇願し、あなたは同意しました。彼はあなたに冠を与え、そしてあなたはそれを守ることを覚えました。それ以来、あなたは巧妙な駆け引きのお陰で、あなたを喜ばせる無限の欲望を彼の中に育てました。彼は働き、お金を手に入れ、あなたの言いなりです。その代わりに、あなたは家を管理するのが大変上手であるのを私は分かっています。その様な力と共に、あなたが自分の権利を軽視していたことも私は分かっています。

しかし、全ての女性があなたと同じ様に幸福ではありません。全ての女性がそんなにも優しい男性と一緒にいることはありません。多くの女性はその様な幸福にはなれません。多くの女性は自分の心に忠実になりたいでしょうし、愛されれば愛される程、愛したいと思うでしょう。多くの女性は実際に一緒にになりたいと思いますし、愛を受ければ受ける程、与えたいと思います。多くの女性は、彼女の主人が支配している奴隷としてのこれらの策略を軽蔑します。以上が、もしも彼女たちに財産が無かったならば、財産を得るように仕事をしたいと思う理由になるのですが、それは彼女たちが期待したり、選択したり、夫を追いかけないでいるようになれることなのです。そういうことは課長とか経営者とか顧客との依存関係の中に身を置くことであるのは、大変に明白です。少なくとも彼女たちは自分の課長たちを愛する必要がありません。彼女たちの仕事は決して気に入ったものではありませんが、要するに彼女たちは遊女というものには決してなりません。女性はそのことを望むことができますし、私は滑稽ではないと信じています」と私は言いました。

(一九〇八年五月八日)

私たちは今でも神学で一杯です。或る男が交通事故に巻き込まれ、かすり傷だけで済んだ時、助かったのは「奇跡のようだ」と私たちは言います。それというのも、もしも右側に座っていたら死んでいただろうと考えるからです。直ぐに私たちはこの事故を神学者になって読もうとしますし、何か隠された意志があると思います。それは事故が人間の生活に関係して来るからです。

逆に、もしも私たちが犠牲者になったと考えるならば、全ての偶然にびっくりして、そうでなければそこで事故にならなかったと思います。もしもその日に雨が降っていたなら、もしも事故に遭った旅行者が一分早くあるいは一分遅く出発していたなら、もしもどんな道であろうと別の道を通っていたなら、もしも運転手がハンドルを切る前に眼鏡を拭いていたなら、別の事態になっていたであろうと思いますし、恐らく少なくとも犠牲者にならずに済んだでしょう。

その様な考えには終わりがありません。何故なら最も小さな状況の、最も小さな変化でも、非常に大きなショックを齎すからです。もしも時間の流れを思考によって遡ったならば、人間は誰でも自分の誕生以後は事故に向かって歩いて来たこの道の曲がり角が、悲劇として存在していたと言うことさえ出来ます。それというのも彼ら一人ひとりの状況は、この世の中で何時も一秒前に行ったことと関係しているからです。私たちの想像力は、この小さな出来事によって誰かを変えたり、我慢ならないイメージを無視するのに苦勞は要りません。しかしながらそのイメージは存在しているのであり、事物をそこに帰着させます。それ故に悲劇的な言葉も口を出ます。「悲しいかな、何故こうなったのか、何故違わないのだろうか」。

そのことが齎すのは、私たちの感情は確かなものと、光が当たらない疑わしいものを照らすことからです。私たちは次のように自問します。この事故は疑わしいものでした。沢山の些細な出来事がそこへ導いていき、決して前もって知ってはいませんでした。私たちは、取るに足りない極めて小さな出来事をその中で組み立てて、大変に大きな事件を生むものではありません。その時先行していたものに従うものを解明するのを諦めて、私たちはあべこべに思考して、出来事そのものの原因を思考します。全ての出来事は、予め決められている目的に向かうが如く起きると私たちは想像します。そこから神とか運命とか宿命という観念が生まれます。要するに、私たちは神学に戻ります。

私たちの不幸を重くするためにしか役立たない〈神々〉というものを無視するためには、重要でない出来事を考えることや、仮定が一致して感心するように訓練するのは有益です。私が書いているこの紙も、何処かの森の樹木でした。如何にしてこの様な紙の繊維となって、他でもない私のペンで書かれることになったのでしょうか。何故このペンはペンであって、大地に還っていないのでしょうか。全ての出来事は等しく疑わしく、等しく必然性があります。塵という雲を箒で掃く時に出来る渦巻は、一つ一つが奇跡であると言えるのです。これら二つの粒子が衝突しないで渦巻になるためには、出来事という驚くべき一致がなければなりません。もしもこれらの塵の粒子が家に住んでいたなら、若い天文学者たちはそのように考えたことでしょう。そして、もしも彼らが大変な学者になったなら、恐らくその箒を崇めることになるのでしょう。

(一九〇八年五月十日)



結婚についての説教が流行しています。もしも私がそれを一人で行ったならば、恋愛と友情について行います。蜜月の愛は一月以上ももたないと言っても、誰もが賛成します。多分、例外もあるのですが、そういうことは良くあることで話すには苦労しません。殆どの場合、もしも結婚が夫婦にとって養老院のようなものを望むなら、友情は少しずつ恋愛に代わるものでなければなりません。

ところで、その困難は小さくないのを私は理解しています。友情は信頼と誠実という二人の姉妹であることを前提にしています。自分の友人の長所を見て好きになるのは恐らく本当でしょうが、欠点を見ないで好きになるのも本当です。そこから友情の素晴らしい力が齎されます。人はそれに身を委ねることも出来ます。友人に時々打ち明けるのは、それだけで自分の生活を保つ勇気がないのです。私の友人は、私にとって私よりも厳しくないと感じています。何故なら私よりも私のことをもっと良く知っているからです。彼は、私が自分自身から教わったことの公正な証人です。カトリック教徒の告白は友情がなくても、友情という慰めを努力して設けようとするものです。友情が一杯になれば、そこは本当の天国です。そこでの会話は決して止みません。退屈知らずです。悲しみさえも喜びに変えます。それは恋愛という嵐の後の港です。

ところで恋愛は、阿諛や嘘がなければ前進しませんから、困難があります。何よりも気に入られようとします。雄弁家が喝采や口笛で迎えられるように、彼らの話は相手の微笑に合わせて決められて行きます。その上、人は愛したいと思えます。愛することが幸せなのです。決して見られたくないことや見られないことがあります。詩人が言うような恋愛は、目隠しをされているのです。

しかしもっと正確に言うなら、欲望は肉体全体に或る種の狂乱を生み、最小のことが際限のない喜びを抱くことになります。そこから美というものを私たちは本当に発見して、孔雀が車輪のように羽を広げて光輝いて勝ち誇ったような言葉で、それを言うようになります。恋愛の手紙というものは美しいものです。阿諛は喜びを生みます。喜びは阿諛を生みます。それは際限がありません。

もしも友情へ到達したいなら、詩から散文へ上手に移行しなければなりません。詩の称賛から何かを取り出さなければなりません。率直に話さなければなりませんし、顔付きや精神を信じた日のことを明らかにしなければなりません。そのことは決して後悔や苦悩なくしては行われません。「昔、あなたはそんなことを言っただけではいなかっただろうに」。殆ど何時も雄弁家は、昔の話に戻ります。彼は、キリスト教の教理を教える公教要理を繰り返して言うのを余儀なくさせられます。それは愛という短い言葉のようなものです。そこから新しいものを発見することは出来ませんが、古いものを無視する必要はありません。従って、礼儀の一覧表は広げて置きなさい。儀式の横暴さから逃れること、人が言っていることを考えること、人が考えたことを言うこと、それが結婚における水先案内人のやり方というものです。そこには迂回しなければならぬ嵐の岬があります。

(一九〇八年五月一四日)

今から二十年ほど前に、私はソルボンヌ大学へ公開講座の最初の授業を聴きに行きました。私は聴いてびっくりしました。教授は、話すのと同時に考えたことを信じさせるために語っていましたが、俳優のようでした。教授が言ったことは、大変に物足りないものでした。彼は、プロシア人の哲学者であるカントのことを話しましたが、用心しているように話をしました。震える声で辺鄙な田舎で祈っているように小声でした。彼は、自分の講義の中でフランクフルト対独講話条約の承諾(1)をカント哲学から決して理解しないように懇願していました。この思索家がプロシア人であることを忘れるお願いをしていました。結局、彼は進行中の軍隊の騒音や国旗の戦ぎに言及したのです。聴衆は何度も繰り返し拍手して立ち上がり、最後には感激するまでになりました。私はといえば、劇場のようなその部屋から出て教室へ這入って、最早あの部屋には戻るまいと思いました。何故なら、問題が混乱していることに我慢ならなかったからです。カントは真実を言っているのか間違っているのかを知るのが重要であるなら、その問題と同時に領土の防衛を論じるのは止めましょう。

私は大変に厳格でした。人々も若い時は何時も大変に厳格でした。その教授は狐みたいに抜け目がなく。公開講座とはそういうものであると知っていたのです。彼は劇場で言うように大袈裟に言いました。劇場であるなら、それで良かったでしょう。そこでは情熱が女王です。笑いや叫び声や口笛が全てを決定します。講師は大衆の奴隷です。作品の質を落とさないように、悪ふざけする人が少しでもいてはなりません。最も小さな出来事でも注意を逸らせます。真面目な聴衆が沈黙しようとしても、他の者が再びそれ以上の大声を出します。新聞が加わります。管理者はうろたえます。そこでの講演は失敗です。

全ての公開講座は廃止すべきだろう、と私は結論を下します。聴講する人々が叫ぶ権利を持つや否や、最早そこに教育はありません。彼らは、私が望んでいる議論が出来るのにやりません。しかし不思議なことに、学生が質問することは誰も認めません。それに反して学生は壁を揺るがす程に両手で拍手するのが大変に自然である、と皆が考えます。そこには現代の最も有名な教授たちが認めた自然発生的な風習があります。教授たちは微笑しました。彼らはまさしく歌手や俳優のように挨拶します。彼らは帽子の羽毛の数や手袋をはめた小さな手の数を数えました。立場は逆になったのです。彼らの精神は地に落ちました。今、彼らは口笛を吹かれ、焼き林檎が投げつけられているのです。彼らが不平を言うのは何に対してでしょうか。それは彼らの教授という職業にあるリスクの一つです。

(一九〇八年五月十九日)

(1) 普仏戦争(一八七〇~七一)の休戦のために、アルザス・ロレーヌの割譲と五十億フランの賠償金を三年間でフランスがドイツに支払う条約で、パリ・コミューンが成立していた時に行政長官のティエールが一八七一年五月十日にフランクフルトで署名した。

昨日、私は独創的な思想で有名な二人の人間の来訪を受けましたが、彼らはまさにカトリック教徒になろうとしている処でした。一人は私の古い女友だちで、出来が良くて何でも知っている頭脳の持ち主で、このことを話題にしながらもう一人のことについて言いました、「それだから彼は気が狂っているのです」。彼女は彼を大変高く買っていて、それが今少しばかり彼を低く見過ぎていたのだと私は思います。

本を沢山読んだ人の知性を判断するのは、大変に困難です。その人の記憶は最良の知性を手本にします。私は先日、科学が少しばかり進歩したという何人かの人に、次の質問をしました。もし立方体の辺を二倍にするなら、当初のものの二倍になった辺は、何個の立方体になるのでしょうか。

この質問に答えるために、絶対に間違いのない、直接的で、確実な方法があります。幼稚園で見かけるように立方体を使う遊びをしに行き、辺を二倍にした立方体の形を作るまで積み重ねれば良いのです。もっと早くやるためには遠近法に従って積み重ねた立方体を描くことも出来ますし、それは幾何学者がやる方法です。もしも描くのが下手であったり、想像力がなかったならば、このやり方では不確実になるかもしれません。結局のところ、木製の立方体や鉛筆や紙が無くても、思考によって解答することが出来ます。しかし、これは危険な方法です。何故なら、紙の助けも借りずに生まれるイマージュは、写真屋で動き回る子供と同じ位に動くものでもあるからです。きれいに思い描くのは不可能です。

しかしながら、私が質問した人たちが飛び掛かるのはこの方法です。従って、私は馬鹿らしい解答を沢山聞きます。或る人は私に言いました。二倍の辺をもった立方体は九倍になっていると。他の人は、四倍であると言い、別の人は六倍であると言い、もっと忍耐強い人は紙切れに形を書いた後で、八倍であると私に答えましたが、未だそれ程の自信はありませんでした。私は、解答がどれであるか、上手に言わないようにしていました。それというのも、真実を求めている人たちに、真実をすっかり言って仕舞うのは良くない行いであるからです。そして、私は彼らを立方体で遊ばせました。

そこには、何でも私たちのことを馬鹿にして、そのことを決して隠そうとしない人がおりました。それは何でも良く知っている背の低い若者でした。その人は木製の立方体も紙も要りませんでした。想像力も使いませんでした。問題は数学の演算に還元して解決していました。辺を二倍にします。そして計算しました。二掛ける二は四で、二掛ける四は八です。この様にして彼は、最も簡単なやり方で苦労することなく真理に到達しました。彼は他人の成果を利用したのです。彼は言葉を大変立派に器用に処理したのです。快活で才能に恵まれた精神というものは、殆ど何時もこの様に思考します。一輪手押車が発明されます。でも再びそれを考えたりしません。精神はその一輪手押車を押して行くばかりです。それ故に、はいどう、〈英知〉に向きなさい。

(一九〇八年五月二一日)

歴史家たちは素晴らしい。彼らは事実だけで満足していると言います。そして、彼らが言う〈事実〉は、何らかの誇張と共に見なければならぬのです。それらの事実が何であるかを探求する時、鼠なら決して望まなかった紙を見つけて書いて行きます。火事、かび、箒そして穴の空いた椅子があれば、その証拠書類が考証されました。偶然に存続してあるものが、歴史上の真実として表しているのです。

これらの考えから私は、責任について話す健全な歴史家であって欲しい精神を取り戻しました。昔は単に動物だけでなく、生命のない物にも裁判をしたと言われています。ヘロドトス(1)がそのことを書いています。裁判所は、何かの危害を加えて私が知らない人を殺した石にも裁判を行ったそうです。

そのことについて私は答えて言います。「それは真実ではありません。石を裁くために、人間が裁判所に集まることであってはなりません」。そうです。そのことが書かれた本が十冊あっても、私の気持ちは決して動揺しません。全く、そんなにも遠くまで遡らなくても、周知の如く完全に空想の出来事を書く色々な新聞記事を十件示すのは難しいことではありません。ドレフュス事件から〈歴史の教訓〉を幾つも引き出すのは困難ですが、一つだけ歴史の良き教訓を取り出すことが出来ます。それは何よりも証言は疑ってかかることであり、次々に色々な意見を聞いて、私たちの見方を変えることです。

この健全な歴史学者に私は次のように言いました。「幼稚園へ行ってご覧なさい。あなたはそこで屢々、純真な子供たちが小石とかベンチで傷付けられるのを見ます。小石やベンチを裁判に掛けて罰を与えよ、と言って下さい。あなたは馬鹿にされるでしょう」。

しかし、その歴史家は私の眼の前で、それらのテキストを見せているのではないのでしょうか。私はそれらのテキストを嘲笑します。全く愚かな者たちが膨大な書物を書いているのは分かり切ったことです。もしも鼠が残されたものを全て食べて、一人の狂人の記憶を子孫に残したならば、彼の周りにいる子供たちや大人たちを見て考えないで、その狂人が言うことを信じなければならぬのでしょうか。

そういうことは信じないで、多くの人々が伝説というものを受け入れていることをつけ加えましょう。異邦人にとっては、人間は実際よりも多くが愚か者であるように見えるのと同じです。沢山の物語が列のように、ヒンズー教の神聖な花車のように創られました。よろしい。ヒンズー教を信じて下さい。それは悪人のイギリス人を少しは正しくするでしょうし、パリで謝肉祭の飾り牛の行列を彼に見せて下さい。もしも彼が記憶で書いたなら、二十世紀のフランスの歴史にとっては貴重な記録になるでしょう。

現代のヒンズー教の基礎となるものを案内して見ましょう。全てを直ぐに検証する短刀がテーブルの上にあるのが分かります。雄弁家たちはそれを指差します。もしも飾り牛に従って私たちが裁くなら、ヒンズー教徒は短刀を裁いて刑を言い渡すのを良く信じる事が出来ます。以上は、歴史家が事実と見做す考え方です。そして、ソルボンヌ大学に歴史の教授が何人いるか知って

いますか。七十四人です。そうです、市民が七十四人いるのです。

(一九〇八年五月二五日)

(1) ヘロドトス(前四八四頃～前四二五頃)は古代ギリシアの歴史家で、ペルシア戦争から『歴史』を著し、歴史の父と言われている。

## 百十七 移住民 (LES PEUPLES MIGRATEURS)

---

講演者の生活には困難な時が幾つもあります。私は、十年前の思い出を良く思い出しますが、それはルアンの町ではありませんでした。弁護士を職業にしている講演者の話を聞きましたが、彼は泉のように次から次に話しました。立証したいことは何なのか、最早分かりませんでした。多分、彼自身にも分からなかったのです。何時までも思い描いていたことは〈ユマニテ (人間性)〉の話でした。問題が何であろうと、ユマニテの話は何時までも思い描くことができます。

彼はそのうちに移住民たちについて話し出し、ステップの高原のことも続けて話しました。彼は放浪生活、羊の群、乾燥した平原、冬、夏のことを語りました。風、草、水の流れ、四季に従って人々は生活し、生きて行くのでした。彼も同じでした。聴衆も生きていました。彼らは勉強するためにそこにやって来た律義な人々でした。

移住民たちは、私たちのようには生きて来なかったと良く考えられています。彼らには、市民権、法律、警察、町、商業、工業もありませんでした。彼らは移住していたのであり、全てがそれで言い尽くされていました。ステップの高原で、地表が露出した荒涼とした大地の儘で、彼らは生きて行きました。話が進むにつれて、砂漠も出てくるようになりました。

そういうことは変化して新しい世界が生まれて、移住民たちは何時までも移住民でいることはないだろうと皆は考えました。勿論、放浪者が放浪することを止めさせる訳です。自分では分からない移り変わりを見付けることも難しいことです。この世の誰もが旅行者そのもので、講演者も同じでした。しかし、講演者に移り変わりは来ませんが、移住者たちには何時も移り変わりがありました。

結局のところ講演者は勇気を奮い起こして、全く単純なことを言いました。「移住者たちは定住する時が来たのです」。聴衆はそれを聞いてほっとしました。新しい時代が始まって、文明が生まれて来るのは確かでした。少なくとも、これらの旅行には時を費やしましたので、文明の進歩という素描には時間が短縮されているのが分かりました。そして、そこからヨーロッパの合衆国が生まれて来るのであり、皆を嬉しくさせる絵画になります。終わり良ければ全て良しです。構いません。人前で話すのが全てであるあなたは、移住民たちを信じてはいけません。

(一九〇八年五月二六日)

楽観主義者が言いました、「美德の方法を発見しようとして頭を絞っている間に、もっと大きな美点が自然に何事もなく導いて行ってくれます。高等動物が達した点や能力や、その構造の巧妙な複雑さが如何なるものかを見て下さい。私たち人間のメカニズムは、鳥の翼を模倣することはとても出来ません。

本当に、美德もそれと全く同じです。私たちが気付かないうちに、進化は次第により良いものになっていくのです。先ず、孤独な人間は社会的人間によって潰されました。次に、集団は敵味方で戦いました。そして、勝ちを齎すのは何時も精神力です。そこから私が理解するのは、人数が同じ軍隊であるなら、勝つのは最も勇気があって規律があり、他人のために自分の人生を与える気持ちを持っている人の数によるということです。

従って、エゴイストたちは必然的に虐殺されるか、奴隷になるかでした。勝利者たちは、すっかり寛大になりました。その美德が、この世を征服したのです。征服者たちは規則を、節度、簡素、大胆、尊敬、従順へ高めました。子供たちは幼年期から父親の経験を利用しました。母親自身は、鉄床の上で槌を打つように子供たちの心を鍛えました。それというのも、美德は決して贅沢であってはならないからで、それは必然です。高潔でなければ、死ななければなりません。必然的に私たちは最良の未来へ行く理由がそこにあります」。

私は彼に言いました、「用心なさい、パングロス先生(1)。〈自然〉には気を付けなさい。譬え自然が長く此方側で眠っていたとしても、反対側でも横になっています。国民は美德によって保つのであり、それは良いことです。その様にして力を手に入れます、つまりローマ人が見てきたような平和です。しかし、成功はまさしく彼らを墮落させます。そこには富と平安があります。軍人精神を少しは必然的に忘れることにならないのでしょうか。彼らは最早、平原にいるように生きて行きません。饗宴や音楽や大変長い夜会を覚えるようになります。彼らの子供たちはもっと悪くなるでしょう。〈野蛮人〉は殆ど躰が教えられていない別の美德と、がさつな戦争の女神を彼らの馬の尻の上で齎すのを私は以前聞いています。恐らく、奴隷に舞い戻ることなく完全には乗り越えられない段階があります。大変な悪人が勝利者になれるのです。大変な美德の人も同じ様に勝利者になれるのです。海の潮の波を見てご覧なさい。毎日、高くなり低くなって何世紀も続いています。あなたが進歩と呼んでいるのは恐らく、上げ潮でしかありません。満ち潮の後は、引き潮です」。

(一九〇八年五月二七日)

(1) ヴォルテールの小説『カンディッド』(一七五九)の登場人物。家庭教師のパングロスは、全てが〈進歩〉することを信じて経験による学習を行いながらも、確固とした楽観主義を守っている。



## 百十九 猫と鼠 (LE CHAT ET LE RAT)

二幕物の芝居です。第一幕です。場面は幼稚園の運動場です。数日前から鼠が通っているのが分かりました。管理人は、町へ鼠捕り器を探しに行きました。それを仕掛けて鼠が捕まりました。今は籠の中でリスのように、或る時は走り回り、又或る時は諦めたように静かにしていますが、大人しい子供のようにピンク色の小さな両手をお互いに交差させています。

本物の鼠を見ながら、鼠について学習する良い機会です。そのためその日のクラスの授業は鼠捕り器の周りで行われます。小さな男の子たちには鼠の足、鼠の尻尾、鼠の眼という名前が付けられ、他の動物の名前を言うように求められます。二十日鼠、猫、aがある他の言葉をいうこととなり、買い物籠 (abas)、オーヴェルニュ地方 (auverbnat)、足跡 (pas)、食事 (repas)、ヌガー (nougat)、背教者 (renégat) のような言葉です。野原 (prè) のように一音綴の言葉は、巢 (nid)、狼 (loup)、馬鹿 (sot)、円 (rond)、皿 (plat)、水差し (broc) があります。要するに、その授業は授業としては馬鹿げています。只、単に動いている鼠がいて、皆が見ているだけです。

そこへ不意に来たのが、管理人が連れて来た元気の良い猫です。右へ行ったり左へ行ったりして、匂いを嗅いだり聞いたり見たりしています。鼠捕り器と鼠に気付いて、腹這いになって待ち伏せます。その時、全く偶然に鼠は走って叫び始め、猫は孤立した兎のように逃げ出します。鼠の授業はそれで終わりです。

第二幕です。その後の年長クラス (年長は多くが五歳) です。視察官は、一生懸命に全精力を使って小さな子供たちに話をさせます。「さあ、巻き毛の君、鼠とは何ですか」。その子供は天井を見ている。「鼠が何であるか君は知らないのかい」。その子供は隣の二人を見て、にこやかに笑っています。「さあ、答えを助けてやろう。鼠は、ど...」。その子供の顔に皺が寄ります。「鼠は、どう...」。子供は別のことを考えます。「鼠は、どうぶつです」。そして、次から次へ質問が続きます。「それは大きいですか、小さいですか。何を食べて生きていますか。鼠の敵は何ですか」。「猫です」と誰かが言います。何故なら猫と鼠については、子供らしいイメージと話があるからです。

「よろしい、さあさあ、猫と鼠が出会っているのを想像してみましよう」と検察官は言います。「何事もなく済むでしょうか。どちらかが怖がるでしょうか。さあ、栗毛の坊やよ、怖がるのは猫ですか、鼠ですか」。「猫です」と子供は迷わず答えます。検察官は微笑します。「さあ、落ち着いて考えてご覧、坊や。はっきりと私の質問が分からないのだね。どちらが怖がりますか。さあ、赤毛の坊や」。「怖がるのは、猫です」。

視察官はそれ以上言いません。しかし、帰りがけに女性教師に言ったことは、猫についての授業がきちんと行われていないのは、初めてのことであるということです。「お嬢さん、イメージと話だけでは経験に代えられないということは証明済みで、はっきりしていますよ」。

(一九〇八年五月二八日)

私は考えれば考える程、ラブレーが話しているブリドワという名の判事に感心します。彼は訴訟手続きの金額が巨額であった時は、骰子一抛で裁判を終えていました。

彼は骰子に従っていました。そして、それが大変に合理的でした。各々の法律が何時も明確であるなら、決して訴訟することもないでしょう。公正な解決が可能であるや否や、当事者たちはその判事と全く同じ利益を見出せることは確実です。従って、解決出来ない問題しか判事の処へ持って来ません。条文がその時に言っているのは、肯定と否定です。二人の訴訟人は、抗弁の余地のない論拠を行います。ブリドワは次のように自問します。「私は選ぶのに常識を当てにするのだろうか。いいえ、絶対に当てにしない。私は骰子を振るのだ。ピエールが正しく、ジャックが間違っている。以上で事は決した」。

しかし、アンジェニュが言います、「何故ピエールが正しくて、ジャックが間違っていると言うのかしら。自由におっしゃって下さい。私は骰子で判決を行った、と言って下さい」。

ブリドワは言います、「いいえ、違う。何故なら、彼らはここに正義を見付けに来ているのであり、骰子の目を見付けに来ているのではないからだ。判決は私には何の勝ちもない。しかし、彼らのために私を信頼して貰うためには、公正でなければならぬし、意見の対立に決着をつけることを私に頼まなければならない。そうして彼らがこの考えを持つためには、私は骰子を隠せば十分である。それというのも裁判に勝つ人は、私が正しいと判断するからだ。従って私には訴訟人の半分がついており、そしてそのことに気付いてくれ、訴訟人の半分は大変な大金持ちになるが、それは裁判に勝つからだ。その他の半分は哀れな奴らだ」。

アンジェニュが言います、「よろしい、しかし何故、不必要な書類で鞆が一杯になるまで、そんなにも長い時間を待つのでしょうか」。

ブリドワは言います、「書類は必要ないが、時間と費用は大いに必要だ。訴訟したい人々の権利を十分吟味する前に、訴訟したい人々のことを全て考えるようになるからだ。もしも訴訟に勝って、示談よりも費用が高くならなかつたなら、誰もが訴訟したがるだろうし、全ての事件が保留される。私が遅くても、それ故に大変に要領が良いのだ。今回も使用した時間は、節約した時間である」。

以上はブリドワが言っていることです。しかし、そう言うのは大変慎重です。そのことは制度に反することになるのでしょうか。いいえ、違います。彼は口頭弁論の時に眠っていて、もう何も聞こえなくなると目覚めて、両眼を擦って骰子を振ります。以上が真相です。出来る人は骰子をしゃぶって下さい。

すらりとした優雅な蜻蛉のように、彼は水面をあちこち飛び回る冷やかし好きであることを忘れません。ラブレーの皮肉の門は、小石のように底まで行くのです。

(一九〇八年五月三一日)

(次章へ続く)

ーノルマンディー人のプロポ II 【2013年6月号】

<http://p.booklog.jp/book/71521>

著者：アラン（翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/71521>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/71521>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ